特別寄稿

# 危機の時代における芸術の公益性

## ――伝統芸能のマネジメント人材育成に携わって――

志　村　聖　子

### プロジェクトの背景と趣旨

現在、我が国では少子高齢化が進み、戦後75年間でも、産業の構造や人々の生活スタイルは大きく変化している。今後ますますAIの実用化が進み、現在の職業の多くが代替されるとの予測もなされている。このように社会の環境や人々の感覚が変わる中で、これまで歴史的に受け継がれて来た文化遺産、特に「伝統芸能」をどのように守り、次の世代に手渡していくかは、重要な社会的課題といえる。

日本の伝統芸能には多様なものがあり、大阪においては雅楽、能、人形浄瑠璃文楽、上方歌舞伎はその代表例といえる。いずれも数百年以上の歳月をかけて、雅楽については千年以上にわたって、時には苦難を乗り越えながら、幾多の人々によって現代まで継承されてきたものである。伝統芸能を理解することは大阪という地域を文化的・歴史的に理解する上で不可欠であり、人々の心の拠り所として、また地域のアイデンティティ形成にも関わる重要かつ共通の財産といえる。

しかし、これまで伝統芸能を支えてきた枠組みは崩れてきており、担い手の不足、また公的支援の不安定さといった問題が顕在化している。伝統芸能に関心を持ち、その存在の重要性を理解する人を増やしていくことが重要であるが、その責任を実演家や実演団体のみに負わせることは妥当でない。なぜならば、伝統芸能と社会の間を架け橋できるような人材、すなわちマネジメント人材を育成していくことには専門性が求められるのであり、社会全体の問題として捉えるべきだからである。

この点、日本では1990年代から全国の音楽大学を中心にアートマネジメント人材を育成するためのコースや学科、講座が開設されてきた。その背景として、1980年代から全国で公立文化施設が急激に増え、ハードは整備された一方で、それらの運営や事業の企画制作を行うための考え方や専門知識、すなわち「アートマネジメント」が欠落してきたことが社会的に認識されたことがある。そして、アートマネジメントを教育する場として、大きく①大学等の高等教育機関と、②現職者等を対象とする研修制度の2つがあるが、指定管理者制度[1)]の導入等によって現場に人材育成の余裕がほぼない現状を考えると、わが国においては、大学が果たす役割が非常に大きいと言える。

相愛大学でも、2010年に音楽学部に音楽マネジメント学科が創設され、2018年度からは音楽学科の中にアートプロデュース専攻を創設することで発展的に改組し、アートマネジメント人材の育成を図っている。

なお、ここで教育の基盤となるのは西洋の音楽芸術（実演芸術、舞台芸術）であるが、同じく実演芸術の性質を有する「伝統芸能」についても扱う意義が大きいと考えてきた。

これには大きく2つの理由がある。まず、1つ目は、西洋音楽と伝統芸能における、産業としての特質や置かれた状況の共通性である。オーケストラやオペラの運営の実際を知る人であれば容易に共感してもらえることであるが、生の音楽や舞台芸術の世界は運営が厳しく、「公演をすればするほど赤字がかさむ」、「チケット収入だけでは収支が成り立たない」のが現実である。ネットで無料で鑑賞できるコンテンツも膨大にあるなかで、他のエンタテイメントとの競争も激しさを増している。芸術団体が、それぞれの芸術性を維持しつつ、社会において自律的かつ持続的に活動を展開していけるように、専門知識や実践能力をもつマネジメント人材を育成していくことが喫緊の課題となっている。そして、伝統芸能においても、西洋音楽や舞台芸術と同様に、その分野の特性上「生産性を高める」ことが困難な分野であり、かつ国民全体で共有、次世代へ継承すべき価値（遺産的価値、遺贈的価値等）を有する点で共通している。

2つ目は、本学が拠点とする大阪が歴史的に芸能の盛んな地域であるという点である。大阪は、古くから海外交易や商業によって発展し、冒頭でも挙げたように、雅楽、能楽、人形浄瑠璃文楽、上方歌舞伎などの多様な伝統芸能が育まれてきた。しかし明治維新（1868年）以降の西洋文化の流入や、産業の構造変化、人々のライフスタイルの変化等により、これらを支えてきた基盤が大きく変化しており、伝統芸能の継承は多くの課題を抱えている[2)]。一方で、伝統芸能の実演家は多数存在しているものの、その活動が社会一般に十分に知られていないことが指摘されてきた[3)]。

このような大阪の特色ある無形文化遺産の存在に着目しつつ、マネジメント上の問題をともに考えていくことができれば、アートマネジメント領域を更に充実させることができるばかりでなく、社会的にも有益ではないかと考えた。「実演家」と「受け手側」の間を介在できるマネジメント人材を、伝統芸能においても育成していくことが求められており、その育成のあり方を本格的に検討していくことは、今後のアートマネジメント分野において対処すべき重要かつ喫緊の課題であるといえる。専門人材を輩出していき、各地で人材が活躍することで、生の音楽や舞台公演の魅力が多くの人に認識され、享受者や支援者を拡大・多様化させていくことが期待される。さらに、芸術文化が様々な機能を発揮し、多様な人々の精神的な拠り所、活力の源泉となり、コミュニティにおける交流や地域活性化の契機となる、といったことも期待できるだろう。

一方、伝統芸能にはジャンルごとの特性や地域性、運営手法の違い等があり、西洋芸術を前提としたアートマネジメント理論や実践方法がどこまで応用可能であるのかは見極めが必要である。さらに、伝統芸能の無形文化財としての側面に鑑み、無形文化遺産として「保存・継承」していく要請と、市民に向けて「公開・活用」していく要請とのバランスを考えることも求められるといえる[4)]。

このような教育的基盤および大阪を取り巻く状況への課題意識のもと、伝統芸能におけるマネジメント人材を育成するための教育プログラムを提案、構築することを目指して、本学では、2019年度から文化庁「大学における文化芸術推進事業」の助成を受けて、「伝統芸能

コーディネーター育成プログラム」を開始した。

この助成事業は、文化庁が「多彩な芸術文化活動を支える高度な専門性を有したアートマネジメント（文化芸術経営）人材について実践的能力の向上等を含めた養成を推進するため、芸術系大学等による公演・展示等の企画・開催も含めた実践的なカリキュラムの開発・実施を支援し、開発されたカリキュラムを広く他大学等に周知・普及させること」を目的として、平成25年度（2013年度）から開始されたもので、年間で平均22件程度の事業が採択されている[5)]。補助額（内示額）については、申請事業の性質や規模によってばらつきがあるものの、概ね1千万円から2千万円台である[6)]。

本事業が掲げた目的は以下の通りである。

「全国の各地域において多様に育まれてきた伝統芸能はその地域の文化的・歴史的理解にあたって不可欠であるのみならず、住民の文化的生活の向上やアイデンティティ形成にも資する重要な共有財産である。しかし、わが国では本格的な少子高齢化時代を迎え労働供給が減少するなか、産業構造やライフスタイルの変化、若者の都市部集中等により各地方における従来の年齢階級別バランスの枠組みが崩れており、伝統芸能や民俗芸能等の活動においても、後継者不足や支援者不足（公的資金の打切り、減額等）などの問題が表面化している。本事業は、このような課題意識のもと、伝統芸能に携わる人材、及び劇場や音楽堂に従事する現職者等を対象に、連続講座や研究プロジェクト等を通して伝統芸能のマネジメントや継承に関わる学習機会を提供し、教育プログラムを開発することにより、次世代の伝統芸能を担う人材の育成、ひいては地域における伝統の継承や文化振興に寄与することを目的とするものである」[7)]。

初年度（2019年度）は、大阪の伝統芸能の中でも、特に長い歴史を誇る雅楽（「聖霊会の舞楽」（重要無形民俗文化財））[8)]を対象として取り上げることとした。相愛大学音楽学部では、戦前より雅楽の教育を行ってきた歴史的経緯があり、現在でも式典で雅楽の演奏がなされるほか、雅楽実技が音楽学部生の履修科目とされるなど、雅楽との所縁が深い。プロジェクトの遂行にあたっては、このような雅楽専門家とのネットワークも生かしながら、伝統芸能におけるジャンルの特性や運営主体、運営方法の違いなどに着目しながら、今後の伝統芸能の担い手（つなぎ手）に必要とされる知識や実践的能力を培うことを目指した。2年目は能楽、そして3年目は人形浄瑠璃文楽にジャンルを広げながらプログラムを展開することとした。

本事業の活動（プロジェクト）は大きく4つの柱で構成され、①連続講座、②研究プロジェクト、③特別公演、④アウトリーチ（2年目より開始）である。

以下は各年度の活動概要の抜粋である。

**〈1年目〉　2019年度：雅楽**

**連続講座**は、伝統芸能のコーディネートにあたる人材が今後の活動を発展させるにあたり、学んでおくべきと考えられる共通の知識基盤を凝縮して提供するものである。社会人の方にも気軽に通って頂きやすいように全6回とし、テーマとしては、伝統芸能を取り巻く社会状況や国際的視点、伝統芸能の宗教性、雅楽の継承の歴史などを取り上げた。初回はプロジェクトのキックオフイベントでもあり、フライブルク音楽大学からベルンハルト・ヴルフ博士（フライブルク音楽大学元副学長、打楽器部門主任）を招聘し、天王寺楽所雅亮会による舞楽「蘭陵王」の実演を入れて、プロジェクトの広報をも

図るものとした。また、雅楽継承の実際のイメージを把握できるように、雅楽の伝習所の見学などを組み入れた他、雅楽の上演を支える基盤ともいえる「楽器」や「装束」にも着目した。楽器については、製作販売に携わる実務家をお迎えして、楽器がどのように作られ、技術が継承されているかの現状を伺った。装束については四天王寺へスタディツアーとして伺い、着付けの様子等を間近に見せて頂く機会を得た。最終回となる第6回目は、山本能楽堂（大阪市中央区、国登録有形文化財）をお借りし、公的支援をテーマに、大阪アーツカウンシルや大阪府・市の方をも交えてシンポジウム形式で実施した。会場は、本町学舎のアンサンブルスタジオにとどまらず、一心寺、四天王寺、山本能楽堂でも実施することができ、大阪の伝統芸能の歴史とも所縁の深い場所に身を置きながら学ぶ機会を提供することができた。

また、**関連行事**についても工夫した。雅楽は、大阪では四天王寺の年中行事における演奏奉納をはじめとして、一年を通して演奏されている。このような機会を「雅楽の本来の形での演奏を鑑賞できるチャンス」ととらえて、受講生に鑑賞を推奨した。例えば8月の「篝の舞楽」（四天王寺）、9月の「観月祭」（住吉大社）、10月の「経供養」（四天王寺）などが挙げられる。このような一連の講座を通して、雅楽が当時の人々にとって神仏に捧げるために不可欠な社会的機能を担ってきたという宗教性についての理解を、実体験を伴いながら多角的に深めていく機会を提供した。この点は特に、仏教の理念に基づいて創設された相愛学園ならではの特色と意義を打ち出せたものと捉えている。

また、**特別公演**（2020年1月24日）は、1年間の成果報告を兼ねて広く公開とし、会場は2019年9月に開館した東大阪市文化創造館DREAM HOUSE大ホールにて実施した。武満徹氏の「四季」に続いて、舞楽の「蘇莫者」、雅楽にインスピレーションを得て作曲された西村朗氏による「オーケストラのための蘇莫者」を融合させて舞台公演を制作する試みとし、ホールの空間を最大限に活用して、天王寺楽所雅亮会（雅楽）と相愛フィルハーモニア（西洋音楽）が織り成す時間芸術の魅力を一般の方々にも身近に楽しんでいただける機会とした。

研究プロジェクトで特筆すべきは、フライブルグ音楽大学との交流である。相愛大学とフライブルク音楽大学は、2013年5月に学術交流協定を締結して以降、交換留学生の受け入れや教員の交流などを継続してきたという繋がりがある。本プロジェクトでは、このような関係を生かして、前述のとおり、連続講座の初回に日本の伝統芸能に造詣の深いヴルフ博士を招聘したほか、12月には本学の教職員がフライブルク音楽大学に赴き、本プロジェクトについて進捗状況を共有し、今後の共同研究活動に向けたディスカッションを行った。日本の伝統芸能の国際的視点からみた魅力や特色について意見交換していくこととし、ドイツからみた日本の伝統芸能の魅力のほか、現代における日本人と伝統芸能の関係について国際的な視点を得る手始めとすることができた。ホルトマイヤー学長からは「教育機関を繋ぐのも、個人同士の関係がベースにあってこそである。外部資金の有無にかかわらず、個人同士のネットワークを軸に今後とも温かい友好関係を構築したい」とのお言葉もいただき、一同にとって存外の喜びとなった。

**〈2年目〉　2020年度：能楽**

2年目は「能」をモデルケースに取りあげ

た。2020年3月以降に感染が全世界に急拡大した新型コロナウイルス感染症の影響を受けて、計画していた全てのプログラムをオンラインでの実施（事前収録、配信）に切り替えることとなり、特別研究員や研究支援職員などスタッフとともに未知の状況に対応することになった。

**連続講座**では、連携機関である山本能楽堂[9]の多大なご協力のもと、全8回の講座の半数を山本能楽堂で収録した（第1回・第3回・第4回・第5回）。連続講座のテーマとして、能・狂言の物語世界と宗教性、能における身体表現、能における演目や舞台演出、能楽のマネジメント活動、能の魅力発信などを取りあげ、これからの伝統芸能コーディネートにあたる人材が理解しておくべき本質的な視点を取り入れた。山本能楽堂でのバックステージツアー（オンラインツアー）や装束・能面についてはプロによる動画収録を取り入れ、美しいビジュアルとともに能に関する実際のイメージを把握して頂けるように工夫した。また、装束の制作者（選定保存技術保持者）をお迎えして、装束制作に関する材料や技術の継承についての現状を伺った。伝統芸能の継承に不可欠となる公的支援のあり方については、大阪アーツカウンシルより統括責任者をお迎えして、コロナ禍における大阪の文化政策の現状や実演団体に対する調査結果などを共有していただいた。

また、海外との往来が困難な状況の中、ブルガリアからペトコ・スラボフ博士（能の海外公演コーディネーター）にオンラインで出演いただき、伝統芸能の企画や普及に関する視点について問題提起していただいた。

講座最終回では、西洋と東洋の舞台芸術・伝統芸能に通底する宗教観や死生観をテーマに、フライブルク音楽大学からヴルフ博士の参加（ビデオレター）を得てシンポジウムを開催し、ギリシア神話「オルフェウス」を契機に、能・雅楽・インド舞踊・宗教学の専門分野の先生方に議論を展開していただいた。

講座の配信にあたり、社会人の方にも気軽に受講していただけるように全8回をすべてオムニバス形式としたほか、各回の配信期間を約1週間程度とし、期間内であればいつでも何度でも視聴可能とするなどして、継続して受講していただきやすいように工夫した。

従来の講義では、講演終了後の質疑応答などを通して、受講生の関心事や反応などを知ることができたが、オンライン講座に切り替えたことで、そのような機会がなくなった。そこで代替策として、講座各回において受講生全員にコメントシートを配布し、理解度や学習成果を把握したほか、毎回の学習についての振り返りを促すこととした。集まった質問は講師の先生方に任意の回答をお願いし、ホームページにて共有を図った。また、受講生の中から育成対象者20名を抽出し、**オンラインミーティング**を5回にわたり開催し、講師の先生をお招きしてのディスカッションや交流の機会を設けた。オンライン化の展開として、国内の様々な地域や海外からも多数の受講生を得られ、大変良い反応を頂くことができたことは大きな喜びであった。

10月には**シンポジウム**「日本伝統芸能を繋ぐ地下水脈を探る～散楽・声明～」を開催した。日本の伝統芸能は、それぞれのジャンルが際立った個性をもっており、個々の伝統芸能同士の関連性を指摘することはできるものの、日本の伝統芸能全体を繋ぐ視座は見えにくいのが現状である。今回のシンポジウムでは、日本の伝統芸能全体を繋ぐ水脈として、散楽と声明をとりあげ、それらによって繋がっている日本の

伝統芸能全体の特質について、専門家の先生方に議論していただいた。

成果報告を兼ねた**特別公演**では、新作能「古今東西物語～オルフェウス～」の上演を行った（収録日 2021 年 1 月 17 日、山本能楽堂）。山本能楽堂の新作能「オルフェウス」は、これまでブルガリアで公演されてきたが、今回は天王寺楽所雅亮会による雅楽（管絃舞楽　萬歳楽）の共演により、伝統芸能における新しい舞台公演を制作する試みを実現することができた。冒頭のプロローグでは、相愛大学音楽研究科アンサンブルの出演により、グルック『オルフェウスとエウリディーチェ』より「精霊の踊り」の演奏が叶い、観客をオルフェウスの世界へと誘い、東洋と西洋の舞台芸術を融合させ、鑑賞していただける機会とした。この活動を通して、伝統芸能が「形式的に継承させるべき硬直的な存在」ではなく、現世代で新たに解釈し直し、公演制作の形で新たに創造しうる可能性の一例を提示できたと考えている。

**〈3 年目〉　2021 年度：人形浄瑠璃文楽**

2019 年度の「雅楽」、2020 年度の「能」に続いて、2021 度は「人形浄瑠璃文楽」をモデルケースに取りあげた。引き続く新型コロナウイルス感染症の影響を受けて、予定していたプログラムをオンラインでの実施に切り替え、文楽における実演家、専門家をはじめ、関係機関の多大な協力を得て、連続講座やシンポジウムなどの事業を実施した。

**連続講座**（全 6 回）については「各界のファンが語る文楽の魅力と可能性－伝統芸能コーディネーターへの視点－」、「文楽公演の制作とマネジメント」、「義太夫・三味線・人形遣いから見た文楽の魅力」、「人形浄瑠璃・文楽の現状と課題」、「伝統芸能の記憶と記録－アーカイブの保全と活用の観点から－」、「地域に息づく人形劇場－伝統芸能の継承、変容と創造－」をテーマに掲げて、順次、収録と配信を進めてきた。各回の学習効果や理解度、伝統芸能に関する意識などを把握するため、受講生にはコメントシートの提出を促し、寄せられた質問に対する講師からの回答をホームページの受講生専用ページで公開してきた。また、コミュニケーションの深化を図るべく、育成対象者を抽出し、講師を招聘してのオンラインミーティングを開催し、オンラインでディスカッションができる機会を提供してきた。

**シンポジウム**（第 1 回）では、特別公演（後述）の事前学習を兼ねて、雅楽・能楽・文楽の実演家を招聘して、「俊徳丸伝承」がそれぞれのジャンルの演目においてどのように具体化、昇華されたかを、実演も交えながら講演、討論をいただいた（シンポジウム「特別公演『四天王寺のドラマトゥルギー』に向けて－雅楽・能楽・文楽の対話」、会場：山本能楽堂）。第 2 回目は関西地域の人形浄瑠璃団体を招聘して実施することとした（「シンポジウム「地域に広がる人形劇場」、会場：相愛大学本町学舎アンサンブルスタジオ）。

成果報告を兼ねた**特別公演**では、上方伝統芸能の共演が実現した。能「弱法師」や人形浄瑠璃文楽「摂州合邦辻」の題材となった「俊徳丸伝承」は、室町時代には既に一般に流布していたとされ、説経節や歌舞伎にも取り入れられるなど、わが国の芸能に大きな影響を与えてきた。この俊徳丸伝承の舞台となった四天王寺は、2020 年に 1400 年御聖忌を迎える聖徳太子によって創建され、日本仏法最初の地であり、当時から社会救済の中心でもあった。今回は、大阪の伝統芸能に所縁の深い四天王寺において、特別に五智光院（国重要文化財）の使用を

お許しいただき、西洋音楽をプロローグに、雅楽・能楽・文楽が織り成す新しい舞台公演を創り上げようとする試みが実現した（2021 年 12 月 26 日に収録、2022 年 2 月以降に配信予定）。

連続講座やシンポジウム等では、国内の専門家のほか、ドイツからはヴルフ博士、ブルガリアからはスラボフ博士に続き、新たに台湾からはロビン・ライゼンダール博士（台原亞洲偶戯博物館　前館長）、ルーマニアからはカリン・モカヌ館長（ツァンダリカ劇場）の各専門家の協力をも得て教育プログラムの充実化を図り、伝統芸能を軸にした多様な交流を展開してきた。メールやオンラインミーティングのほか、資料の郵送などを通して何度もやり取りをさせていただき、筆者自身も多くのことを学ばせて頂いた。

受講生については、年ごとに人数が増加し、国内外から多数の受講生を得たことで、伝統芸能に焦点をあてたプログラムを継続することの意義や使命を改めて認識した。オンライン講座を通じて、受講生が各自のペースで視聴でき、かつ一定期間に意識を集中して受講できることは、コロナ禍における（数少ない）プラスの教育的側面でもあるだろう。中には既に伝統芸能のコーディネーターとして活動を開始されている例も出てきており、大変嬉しく受け止めている。これまでの事業は、特にコロナ下の 2 年間は座学中心になりがちであったが、受講生の今後のコーディネート活動に向けての刺激となり、さらに学習の深化と応用が図られていくことを期待したい。

これまで 3 年間の事業遂行にあたっては、講座やシンポジウムに登壇・出演いただいた、雅楽、能楽、人形浄瑠璃文楽の各界の第一線の実演家や関連分野の専門家の方々、また、天王寺楽所雅亮会、山本能楽堂、人形浄瑠璃文楽座、四天王寺、一心寺、大阪アーツカウンシル、能勢町立浄るりシアターほか多様な機関の協力をいただいた。実行委員会委員からは会議にて毎回有益な助言やアイディアをいただき、プロジェクトを支えて頂いた。マネジメント面では事務職員、特別研究員をはじめ、本学の先生方、そして学長室、総務課、財務課など関係各位の支援をいただいた。これらの協力や連携なくして出来なかったことばかりである。すべての方々のお名前を挙げることはできないが、本プロジェクトを支えて下さった全ての皆様に心より御礼申し上げたい。

**注釈**

1）指定管理者制度は、公立文化施設を含む「公の施設」の運営を、施設所有者である自治体のみならず、民間事業者にも委ねることを可能とする制度で、2003 年、地方自治法（第 244 条の 2）の改正により導入された。この改正によって、公立文化施設の運営に株式会社などの民間企業や NPO 法人なども参入しやすくすることで、多様化する住民ニーズに民間のノウハウを生かし、イベント等のソフトの充実による利用者の満足度向上、自治体の経費削減などが期待された。しかし実際は、指定期間が数年に限られ、文化施設運営に必要な専門人材が定着しにくいことや、自治体の評価指標では経済的合理性が優先されやすく、事業費や人件費のコストカット、ひいてはソフト面の質の低下などの構造的問題が指摘されている。

2）志村聖子「人形浄瑠璃文楽に対する公的支援とマネジメントの課題－国・自治体の役割に着目して－」『相愛大学研究論集』第 36 巻、相愛大学、2020 年。

3）岡田麗愛・志村聖子・垣内恵美子「日本舞踊における持続可能な基盤づくりに向けた研究－舞台活動の活性化のために－」『音楽芸術マネジメント研究』第 8 号、日本音楽芸術マネジメント学会、水曜社、2017 年。

4）志村聖子・大久保真利子・出口実紀「伝統芸

能における継承の課題とマネジメント人材の方向性」『音楽芸術マネジメント研究』第 12 号、日本音楽芸術マネジメント学会、水曜社、2021 年。

5）文化庁のホームページ「採択実績」より算出、https : //www.bunka.go.jp/seisaku/geijutsubunka/shinshin/daigaku/）

6）前掲 5）より算出。

7）相愛大学「伝統芸能コーディネーター育成プログラム『特別公演』パンフレット「成果報告」と同旨。

8）天王寺楽所雅亮会（本拠：大阪市）は、国・重要無形文化財「聖霊会の舞楽」（天王寺舞楽）をはじめとする四天王寺での伝統的な舞台に加えて、住吉大社、厳島神社で定期的に奉納舞楽を行うほか、無形文化財を広く一般に公開することを目途として毎年フェスティバルホール等での自主公演会を開催している。SNS や YouTube での配信にも積極的に取り組んでいる。https : //tennojigakuso.org/index.html

9）公益財団法人山本能楽堂（本拠：大阪市）は、能を「現代に生きる魅力的な芸能」として広く一般にその魅力や素晴らしさを伝えるため、「新しい視点に立ったオリジナルな企画でプロデュース公演を開催し、教育文化事業に取り組」むなど精力的に活動している。http : //noh-theater.com/index.php

## 資料：相愛大学「伝統芸能コーディネーター育成プログラム」3 年間の活動概要

**2019 年度の活動　－モデルケース「雅楽」－**

〈連続講座〉

①国際的視点からみた雅楽の魅力

講師：ベルンハルト・ヴルフ（フライブルク音楽大学教授、打楽器奏者）

小野真龍（天王寺舞楽協会常任理事）

②伝統芸能と社会包摂

講師：釈徹宗（相愛大学教授、宗教学者）

安田登（能楽師）

③雅楽・舞楽の歴史と現状の課題

講師：小野真龍（天王寺舞楽協会常任理事）

④伝統芸能の「いま」を記述する

講師：広瀬依子（追手門学院大学講師）

⑤雅楽の公演活動を支える基盤－楽器編－

講師：細田至紀（株式会社たなかや代表取締役）

出口実紀（相愛大学特別研究員）

⑥［シンポジウム］伝統芸能に対する公的支援を考える

登壇：小野真龍（天王寺舞楽協会常任理事）

山本章弘（公益財団法人山本能楽堂代表理事、公益社団法人能楽協会理事）

釈徹宗（相愛大学教授、宗教学者）

須田弘樹（大阪府立上方演芸資料館「ワッハ上方」館長）

廣原一彦（大阪市経済戦略局文化部文化課長）

中西美穂（大阪アーツカウンシル統括責任者）

志村聖子（相愛大学音楽学部准教授）

企画協力：大阪アーツカウンシル

〈スタディツアー〉

「雅楽の公演活動を支える基盤－装束・文化財編－」（スタディツアー）

日時：2019 年 9 月 10 日　17 : 00-19 : 00

会場：四天王寺「聚徳殿」

講演：三上正樹（株式会社三上装束店代表取締役）

小野真龍（天王寺舞楽協会常任理事）

渡邉慶一郎（四天王寺勧学部文化財係）

〈特別公演〉

日時：2021 年 1 月 24 日（金）18 : 30 開演

会場：東大阪市文化創造館 Dream House　大ホール

主催：相愛大学

後援：大阪市、大阪市中央区、大阪市住之江区、大阪府教育委員会、東大阪市、東大阪市教育委員会

プログラム：

2019 年度成果報告「伝統芸能コーディネーター育成プログラムの成果と課題」

講演：志村聖子（相愛大学音楽学部准教授）

〈第 1 部〉　雅楽古典の伝承と新たな可能性

天王寺楽所「蘭陵王」

演奏：天王寺楽所

舞人：小野真龍（天王寺楽所雅亮会副理事長、天王寺舞楽協会常任理事、相愛大学雅楽担当講師）

武満徹「四季」

演奏：中谷満（相愛大学音楽学部教授、打楽器奏者）

マイケル　W. マーフィー（フライブルク音楽大学交換留学生）

天王寺楽所雅亮会［林絹代・髙木了慧（相愛大学雅楽担当講師）］

編成：パーカッション　×　雅楽楽器

〈第 2 部〉　協奏の「蘇莫者」

「蘇莫者」をめぐる対談

対談：西村朗（作曲家、2020 年度より相愛大学客員教授）

小野真龍（天王寺楽所雅亮会副理事長、天王寺舞楽協会常任理事、相愛大学雅楽担当講師）

協奏の「蘇莫者」

天王寺舞楽「蘇莫者」より「出手（乱声）」–「音取」–「序」

演奏：天王寺楽所雅亮会

「オーケストラのための蘇莫者」より第 5 楽章「破」– 第 6 楽章「後奏曲」

演奏：相愛フィルハーモニア

指揮：小林恵子（相愛フィルハーモニア指揮者）

コンサートミストレス：小栗まち絵（相愛大学大学院音楽研究科教授）

退出音声　長慶子

演奏：天王寺楽所雅亮会

## 2020 年度の活動　－モデルケース「能」－

〈連続講座〉

①能・狂言の物語世界と宗教性　－能におけるシテ・ワキの役割と視点から－

講師：釈徹宗（相愛大学教授、宗教学者）

山本章弘（能楽師・シテ方）

安田登（能楽師・ワキ方）

②能と身体表現

講師：内田樹（神戸女学院大学名誉教授、武道家）

釈徹宗（相愛大学教授、宗教学者）

③能における演目と舞台演出　－「神男女狂鬼」を通して味わう舞台－

講師：山本章弘（能楽師・シテ方）

④能における舞台装置と道具　－能舞台・能面・装束に宿る記憶と美－

講師：山本章弘（能楽師・シテ方）

佐々木洋次（株式会社佐々木能衣装　代表取締役社長）

⑤能におけるプロダクションとマネジメント

講師：山本佳誌枝（公益財団法人　山本能楽堂　事務局長）

⑥伝統芸能の魅力と国際的な発信

講師：ペトコ・スラボフ（伝統芸能コーディネーター）

⑦伝統芸能の発信と支援方策　－大阪における文化政策の持続可能性－

講師：中西美穂（大阪アーツカウンシル統括責任者）

志村聖子（相愛大学音楽学部准教授）

企画協力：大阪アーツカウンシル

⑧［シンポジウム］東西の舞台芸術に表出する宗教観　－伝説「オルフェウス」の世界と舞台をきっかけに－

講師：小野真龍（天王寺舞楽協会常任理事、天王寺楽所雅亮会副理事長、本事業特別研究員）

山本章弘（公益財団法人山本能楽堂代表理事、公益社団法人能楽協会理事）

大谷紀美子（相愛大学客員教授、インド舞踊家）

釈徹宗（相愛大学教授、宗教学者）

ベルンハルト・ヴルフ（フライブルク音楽大学元副学長、打楽器奏者、作曲家）

〈シンポジウム〉

「日本伝統芸能を繋ぐ地下水脈を探る～散楽・声明～」

会場：相愛大学本町学舎アンサンブルスタジオ

講演：大倉源次郎（大倉流小鼓方十六世宗家、人間国宝）

藤田隆則（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授）

小野真龍（天王寺舞楽協会常任理事）

釈徹宗（相愛大学人文学部教授）

〈特別公演〉　新作能「オルフェウス」

日程：2021 年 1 月 17 日（収録日）

会場：山本能楽堂［国登録有形文化財］

後援：大阪市、大阪市中央区、大阪市住之江区、大阪府教育委員会

協力：山本能楽堂

プログラム

〈第 1 部〉　成果報告「伝統芸能コーディネーター育成プログラムの成果と課題」

講演：志村聖子

〈第 2 部〉　新作能「オルフェウス」

◆能（山本能楽堂）

シテ（オルフェウス）　山本章弘

ツレ（エウルディケー）　河村浩太郎

トモ（ヘルメス）　山本麗晃

ワキ（琴弾き）　有松遼一

アイ（所の者）　小笠原弘晃

笛：斉藤敦　小鼓：古田知英　大鼓：守家由訓

太鼓：中田弘美

後見：梅若猶義

地謡：吉井基晴、大西礼久、今村一夫、笠田祐樹

◆雅楽（天王寺舞楽 天王寺楽所雅亮会）［管絃舞楽　萬歳楽］

［舞人］吉光信昭、新發田恵司、丸川司文、多治見眞篤

［打物］鞨鼓：寺西覚水　太鼓：塩田隆志　鉦鼓：和田敦子

［管方］楽箏：小野真龍　楽琵琶：髙木了慧

鳳笙：林絹代、植木明佳理、山内望

篳篥：前川隆哲、多田真円、吉本乗亮

龍笛：中原詳人、藤康隆、勘田紅美

［装束方］奥田英織、眞藤眞

◆相愛大学音楽研究科アンサンブル　［グルック作曲　オペラ『オルフェオとエウリディーチェ』より「精霊の踊り」］

1st ヴァイオリン　藤岡佐恵子（大学院 2 年）

2nd ヴァイオリン　山本みなみ（大学院 1 年）

ヴィオラ　芝内もゆる（大学院 1 年）

チェロ　稲本愛歌（卒業生）

コントラバス　永田裕紀（大学 4 年）

1st フルート　井上帆南（大学院 2 年）

2nd フルート　中野彩（大学院 1 年）

## 2021 年度の活動　－モデルケース「人形浄瑠璃文楽」－

〈連続講座〉

①「各界のファンが語る文楽の魅力と可能性

－伝統芸能コーディネーターへの視点－」

講師：釈徹宗（相愛大学　人文学部教授）

わかぎゑふ（劇作家・演出家）

山村若静紀（上方舞）

桂吉坊（落語家）

峯田悦子（株式会社コテンゴテン　代表）
②文楽公演の制作とマネジメント
講師：西原フミ子（公益財団法人　文楽協会）
③義太夫・三味線・人形遣いから見た文楽の魅力
講師：釈徹宗（相愛大学　人文学部教授）
豊竹呂太夫（文楽　太夫）
鶴澤清介（文楽　三味線奏者）
桐竹勘十郎（文楽　人形遣い、人間国宝）
④人形浄瑠璃・文楽の現状と課題
講師：後藤静夫（京都市立芸術大学　名誉教授）
⑤伝統芸能の記憶と記録－アーカイブの保全と活用の観点から
講師：小野真龍（天王寺楽所雅亮会副理事長）
山本佳誌枝（公益財団法人山本能楽堂事務局長）
中西美穂（大阪アーツカウンシル統括責任者）
志村聖子（相愛大学音楽学部准教授）
企画協力：大阪アーツカウンシル
⑥地域に息づく人形劇場－伝統芸能の継承、変容と創造－
講師：松田正広（淨るりシアター館長）
カリン・モカヌ（ツァンダリカ劇場館長、ルーマニア）
ロビン・ライゼンダール（Taiyuan Asian Puppet Theatre Museum　前館長、台湾）
志村聖子（相愛大学音楽学部准教授）

〈シンポジウム〉
①特別公演『四天王寺のドラマトゥルギー』に向けて－雅楽・能楽・文楽の対話
会場：山本能楽堂
出演：竹本綴太夫（文楽　太夫）
竹澤宗助（文楽　三味線奏者）
桐竹勘十郎（文楽　人形遣い、人間国宝）
山本章弘（観世流能楽師シテ方）
小野真龍（天王寺楽所雅亮会副理事長）
②地域に広がる人形劇場
会場：相愛大学本町学舎アンサンブルスタジオ
出演：人形芝居えびす座（兵庫県）、阿波木偶箱まわし保存会（徳島県）、乙女文楽（大阪府）、
能勢人形浄瑠璃鹿角座（大阪府）
ベルンハルト・ヴルフ（フライブルク音楽大学元副学長、打楽器奏者、作曲家）

〈特別公演〉聖徳太子 1400 年御聖忌記念　上方伝統芸能特別共演
「四天王寺のドラマトゥルギー　～俊徳丸伝承をめぐって～」
主催：相愛大学
会場：四天王寺五智光院
後援：大阪市、大阪市中央区、大阪市住之江区、大阪府教育委員会
プログラム

◆ご挨拶：和宗総本山　四天王寺　執事長　瀧藤　尊淳
◆プロローグ演奏（相愛大学アンサンブル）
ドヴォルザーク作曲　交響曲第 9 番　ホ短調 op.95『新世界より』第 2 楽章『家路』
1st ヴァイオリン：沖本みなみ（大学院 1 年生）
2nd ヴァイオリン：浦島朱音（専攻科）
ヴィオラ：中川雲母（専攻科）
チェロ　：大槻未弦（卒業生）
コントラバス：小島琳太郎（卒業生）
◆雅楽（天王寺楽所雅亮会）舞楽　『採桑老』
［舞人］採桑老：小野真龍
懸人：藤原憲
［管方］鞨鼓：寺西覚水、太鼓：塩田隆志、
鉦鼓：和田敦子、鳳笙：林絹代、植木明佳理
篳篥：前川隆哲、髙木了慧
龍笛：中原詳人、川端晃正
［装束方］吉光信昭、奥田英織
◆能楽（山本能楽堂）『弱法師』
シテ（俊徳丸）　山本章弘
ワキ（高安通俊）　安田登
笛　野口亮
小鼓　成田達志
大鼓　守家由訓
後見　赤瀬雅則
地謡：吉井基晴、大西礼久、梅若基徳、山田薫、山本麗晃

◆文楽（人形浄瑠璃文楽座）『摂州合邦辻』
太夫　：竹本錣太夫
三味線　：竹澤宗助
（人形配役）
玉手御前：桐竹勘十郎
浅香姫　：吉田簑紫郎
合邦道心：吉田玉助
俊徳丸　：吉田簑紫郎
その他の人形遣い：吉田玉翔、吉田簑太郎、桐竹勘次郎、桐竹勘介、吉田簑之、桐竹勘昇、豊松清之助
ナビゲーター：桂　吉坊（落語家）　舞台監督：黒飛忠紀